

副論文 1

一人暮らし男性高齢者が人と交流する際の  
方略と課題に関する質的研究  
～社会参加プログラムの開発を目的とした  
ニーズの解明～

A qualitative study on the strategies and tasks for improving  
the social interactions of elderly males living alone:  
Identifying the needs for the development of social  
participation programs

野村 健太<sup>\*1</sup>, 小林 法一<sup>\*2</sup>

\*<sup>1</sup> 目白大学保健医療学部作業療法学科

\*<sup>2</sup> 東京都立大学大学院人間健康科学研究科

作業療法 第40巻2号 186-194, 2021

2020年2月10日受付, 2020年8月11日受理

DOI: [https://doi.org/10.32178/jotr.40.2\\_186](https://doi.org/10.32178/jotr.40.2_186)

## 要旨

本研究の目的は、一人暮らしをしている男性高齢者を対象とした社会参加プログラムを開発するために、人との交流に関する構造を明らかにし、ニーズを解明することである。A地区に在住の65歳以上の一人暮らし男性高齢者10名を対象とし、半構造化面接を行った。逐語録をKJ法にて構造化・図解化・叙述化した。その結果、一人暮らし男性高齢者は、人と【自然な関係の維持】をしたり、【自分のコミュニティ狭小化】を食い止め【つながりの保全】を得ることが課題と思われた。この課題を解決するために、人との交流に関する方略である【支援を受けるハードル】と【暮らし再建の保留】に、潜在的な支援のニーズがあると考えられる。

Key Words：ニーズ，地域在住高齢者，（一人暮らし），  
社会参加，質的研究

## Abstract

This qualitative study focused on how to determine the strategies for improving the social interactions of elderly males living alone and highlighted the significance of developing an effective social participation program. For these purposes, semi-structured interviews were conducted with 10 elderly males living alone. The collected data were subsequently analyzed according to the affinity diagram. Results revealed that the males had various tasks such as maintaining natural relationships, establishing, and maintaining connections, and preventing one's community from becoming too narrow. Subsequently, certain aspects were identified, including resistance to support and opposition to rebuilding their living situations. Moreover, the results indicate the necessity of a program which helps elderly males living alone adjust their strategies for social interactions.

Key words: Needs, Elderly males, Living alone,

Social participation, Qualitative study

## はじめに

1980年代の我が国の世帯構造は、三世代世帯が全世帯の約半数を占めていた<sup>1)</sup>。しかしそれ以降、同居家族員が減少し、2015年には高齢夫婦のみと一人暮らし世帯が過半数を占めるようになった<sup>1)</sup>。中でも、一人暮らし高齢者の増加は男女ともに顕著であり、2015年には男性約192万人、女性約400万人、高齢者人口に占める割合は男性13.3%、女性21.1%となっている<sup>1)</sup>。このような中、男性高齢者は女性高齢者に比べ、退職後に人とのつながりがなくなり、地域に参加できずに老年期を迎えることが多く、社会的孤立傾向に陥りやすいことが報告されている<sup>2)</sup>。

社会的孤立は、ソーシャルサポートに乏しい、低所得である、住環境が劣悪である、生活満足度が低い、自殺の危険因子である、健康寿命の危険因子である、などとの関連が明らかになっている<sup>3)</sup>。また、男性高齢者は介護予防事業への参加が少ない傾向があり、性別による特性を考慮して支援する必要性があると言われている<sup>4)</sup>。竹原ら<sup>5)</sup>は、通所サービスを利用する高齢者の役割変化の性差について調査し、女性は歳を重ねることで「趣味人・愛好家」や「組織への参加者」としての役割が増加し、社交的で趣味などを通して人との交流が多い一方で、男性は増加した役割が少なく、新たな役割を獲得することが難しいことを明らかにした。このように、男性高齢者は女性高齢者に比べて人と交流したり地域の活動に参加することが難しく、特に一人暮らしをしている男性高齢者が地域に参加することを促すプログラムの必要性が高いと言える<sup>6)</sup>。

西野ら<sup>7)</sup>は、地域で生活する男性脳卒中障害高齢者の作業適応と人間関係の変容プロセスを明らかにし、男性高齢者が健康な頃から近隣の人々と同じ関心を持つ作業に従事できる環境があれば、感情的なつながりを得て、コミュニティを形

成できると述べている。これは、男性高齢者が地域に参加するためには、作業療法の観点を用いた支援が有用である可能性を示唆している。地域における作業療法を用いたプログラムの開発には、特定の対象者のニーズを調査し、プログラムの目的と目標を決めたり、介入の優先順位をつける必要がある<sup>8)</sup>。しかし、社会的に孤立しやすい高齢者の特徴として、一人暮らし男性高齢者に言及する調査研究は散見されるが、プログラム開発を前提とした一人暮らし男性高齢者のニーズを詳細に調査した国内の研究は見当たらない。さらに、一人暮らし男性高齢者を支援するには、高齢者個人の自律性や孤独感、近隣との関係性と慣習を勘案<sup>9)</sup>することが必要とされている。つまり、開発したプログラムを行う予定の地域に住む一人暮らし男性高齢者に対して、地域に参加するための人との交流に対するニーズを調査する必要がある。

## 目的

本研究の目的は、A地区で一人暮らしをしている男性高齢者を対象とした社会参加プログラムを開発するために、人との交流に関する構造を明らかにし、ニーズを解明することである。

## 方法

### 1. 研究デザイン

本研究のデザインは個別面接による質的研究とし、質的研究を報告するための統合基準（COREQ）<sup>10)</sup>に従った。

### 2. 対象

対象は、A地区に在住の65歳以上の一人暮らし男性高齢者10名とした。A地区は都市近郊の住宅地であり、近年は転入者が増加している。2018年現在の人口は約11万500人で高齢化率は29.7%である。対象者の人数を10名と設定した根拠

は、後述する KJ 法を用いた先行研究において 8~10 名<sup>11~13)</sup>で行われていることと、プログラム開発において考慮すべき主要なニーズ、つまり当該地域の一人暮らし男性高齢者全般に共通して、およそ当てはまるニーズを明らかにするという研究目的が達成可能と判断したからである。

対象の条件は、戸建てあるいは集合住宅で一人暮らしをしている者、面接が可能な者とし、配偶者が入院または入所中の者は対象外とした。対象者は、A 地区の 3 つの地域包括支援センターに、社会参加への困難さと一人暮らしの困難さを感じ始めている虚弱な高齢者を紹介してもらうよう依頼した。その後、筆頭筆者が直接、研究目的、方法、研究倫理などの説明を行い、口頭と書面で同意が得られた者のみ対象とした。

なお、本研究は首都大学東京（現東京都立大学）荒川キャンパス研究安全倫理審査委員会（承認番号：17078）、および目白大学における人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会（承認番号：17-050）の承認を受けて実施した。

### 3. 調査方法

面接ガイド（表 1）を使用しながら半構造化面接を行った。面接場所は、対象者の都合の良い場所とし、面接は全て筆頭筆者が行った。筆頭筆者と対象者は、研究の概要を説明する日が初対面であった。面接に先立ち、筆頭筆者は回復期病棟と訪問看護での臨床業務を経験した作業療法士であること、現職は作業療法士を養成する大学の教員であること、大学院博士後期課程在学中であること、主な研究テーマが一人暮らし高齢者の社会参加に関する研究であることを伝えた。面接回数は、対象者 1 名につき 2 回とし、2 回目の面接の始めに 1 回目の面接内容の確認を行った。面接内容は、IC レコーダーに録音し、後日逐語録を作成した。

### 4. データ構造化の方法

データ構造化の方法は、民族地理学者である川喜田二郎が

創案した KJ 法<sup>14)</sup>を活用した。KJ 法は、収集した情報を創造的に発想し、統合することにより渾沌としたデータそのものの訴えかけ（以下、志）から秩序を見出し、構造化し、その本質を象徴的に明らかにすることができる手法である<sup>14)</sup>。

本研究の目的は、一人暮らし男性高齢者の人との交流に関する語りから、交流の状況・構造の本質の解明と潜在的なニーズを発想することであるため、KJ 法を用いて構造化することが適切であると判断した。KJ 法の手順は、まず逐語録を読み、全体感を把握し、研究テーマにとって関係がある内容を単位化・圧縮化したラベルを作成した。次に、多段ピックアップという技法で多量のラベルからラベルの精選を行った。その後、ラベル群の全体感を背景としたデータの志の親近性によってグループ編成を行った。ラベルを集め、セットになったラベルには「表札」と呼ばれる統合概念を与え、セットにならなかったラベルは「一匹狼」とした。ラベルのグループを図解上では「島」と呼び、それぞれ「シンボルマーク」という象徴概念を記した。最後に、島同士を島の志をもとに関係線を使用し構造化・図解化・叙述化した。

筆頭筆者は、過去に健康高齢者 9 名、一人暮らし男性高齢者 11 名<sup>15)</sup>、一人暮らし女性高齢者 10 名<sup>16)</sup>、作業療法士 4 名に対して、面接調査による質的研究を実施した経験がある。また、本研究に先立って、筆頭筆者は KJ 法の教育・研修本部である霧芯館<sup>17)</sup>にて、計 3 日間の研修を受講した上で、霧芯館主宰の川喜田晶子氏に KJ 法の過程について指導を受けた。さらに、質的研究に精通している共同筆者にも指導を受け、作業療法士 11 名から構成される大学院のゼミにて協議し、確実性の確保に努めた。

## 結果

### 1. 面接調査の結果

面接は、2017年8月に開始し2018年3月に10名の面接を終了した(表2)。平均年齢と標準偏差は77.3±9.4歳、面接時間の合計は884分、1回あたりの平均面接時間は88.4±18.1分だった。要介護度は要支援1から要介護1だった。調理や買い物などのIADLに介護保険サービスを利用している対象者が2名おり、その他の対象者は利用していなかった。面接場所は1名のみA地区内の地域包括支援センターで行い、その他の対象者は対象者の自宅で行った。面接回数は対象者1名につき2回行ったが、1名のみ体調不良により2回目の面接を拒否した。この体調不良者については電話で1回目の面接内容の確認を含む面接を実施した。

### 2. 構造化の結果

#### 1) 図解の全体像

総ラベル数は553となり、多段ピックアップにより50ラベルを精選し、図解を作成した(図1)。図解のタイトルは「支援を受ける抵抗感との葛藤」とした。以降、ラベルは〔 〕、第1表札は〈 〉、第2表札は《 》、シンボルマークは【 】の記号で示す。

一人暮らし男性高齢者は心身の老化が進むことで、徐々に【自分のコミュニティ狭小化】が進んでいる。そのような中でも、人や支援との【つながりの保全】による安心感があれば、【心の張り】を得たり、【一人を楽しむ】ことも可能となる。一方で、人付き合いに見切りをつける【諦めた相互理解】の面を持ち合わせることがあり、これは【自分のコミュニティ狭小化】によって【頼れる人がいない】ことから引き起こされている。人との交流を諦めようとしても、本心では【自然な関係の維持】を望んでいる。【自然な関係の維持】は地域の人との馴染みのある関係性の維持に対する意欲である。一

方で、介護予防や介護保険サービスなどの支援という今まで関わりのなかった新たな関係性、言わば自然ではない関係性に抵抗する場合、【支援を受けるハードル】が高くなり、支援を受けずに一人で解決しようとする方略をとる。しかし、人との交流に関する問題を一人で解決するには限界があり、閉塞感と葛藤を感じながら時間が経過し、【暮らし再建の保留】がなされる。これらの方略は【過去との折り合いの難しさ】と相まって、一筋縄ではいかない事態になっている。

## 2) コミュニティの狭小化の始まり

【自分のコミュニティ狭小化】の島では一人暮らし男性高齢者の《長年住む中で自分が参加できる場はなくなりつつある》姿が浮かび上がっている。〔昔あった町内の組の集まりは少なくなり、小規模化している〕ことから、〈昔とは文化が変わり、地域の人とのつながりは弱くなった〉と捉えている。また、加齢に伴い移動能力が低下し、〔興味のある催しがあっても往復が難しいと参加しない〕ことが増え、〔地域にどこにも行き場がない〕と感じていることから、〈交流の場へのアクセスに抵抗・困難がある〉という状況に陥っている。

## 3) コミュニティの狭小化からポジティブな方面の島

図解では、【自分のコミュニティ狭小化】の島から【つながりの保全】と【頼れる人がいない】の2方面に因果関係の矢印が伸びている。【頼れる人がいない】はネガティブ、【つながりの保全】はポジティブな方面であり、まずポジティブな方面から述べる。

【つながりの保全】は人とのつながりから得られる安心感とそれを保とうとする姿勢であり、《つながっている安心、つながれる自信がある》姿が浮かび上がっている。〔困った時は娘と息子に電話してすぐ来てくれるので全然心配がない〕という環境により、〈親族・家族とつながっている安心感がある〉という精神的な後ろ盾がある。このような親族・家族とのつ

ながらだけでなく、〈生活で困った時にサービスを利用することに抵抗がない〉というサービスとのつながりによる生活の後ろ盾がある。このように、人と資源とのつながりの後ろ盾により安心と自信を得ている。

【つながりの保全】と関係している【心の張り】の島では、《心の張りが保てる活動やつながりを大事にする》姿が浮かび上がっている。まず、〈前向きに取り組める交流を伴う活動が活力となる〉ように趣味や日課に取り組んでいる。〔健康を保ち、子と孫に心配をかけないのが目標である〕場合は、〈大切な人のために健康を維持しようという心の張りがある〉状態となっている。また、〔誰かの世話になる前に、誰かの役に立つ機会が増えたら良いと思う〕と考え、〈自分の得意なことを活かして人の役に立つ機会を増やしたい〉と願っている。

【一人を楽しむ】、つまり〔良い面も悪い面も一人暮らしを楽しむ〕ことは【心の張り】と関係している。

#### 4) コミュニティの狭小化からネガティブな方面の島

【自分のコミュニティ狭小化】の島から【頼れる人がいない】のネガティブな島につながり、《いざという時に頼れる関係がなくて不安である》という不安感が表れている。具体的には、〔近所づきあいはなく、頼れる人はいない〕、〔何かあった時に相談できる人がおらず不安は不安〕という、不測の事態に怯える姿が浮かび上がっている。これが進行すると、【諦めた相互理解】の島、つまり《理解しあえる関係を諦めながら過ごしている》状態となる。〔友人と月に1回会うのは楽しみだが今は遠慮するようになった〕ことから、徐々に孤独感を強め、〈段々と人と疎遠になっていく寂しさを噛みしめる〉ようになる。悲観的な考えが強まり、〔不安を人に話してもあてにならず楽にはならない〕と口数が減る。そして〈他人に自分のことや不安を理解してもらうことにあまり意味はない〉との考えに至る。この【諦めた相互理解】は【つながりの保全】

とは反対の志である。

【諦めた相互理解】の島は【自然な関係の維持】の島と関係している。【自然な関係の維持】は、理解し合える関係を諦めても、本心では《自然に集まり気にかかけあう関係を維持したい》という願望である。例えば、〔ごみ集積所の当番を近所の人と交代で行っている〕という日常的で自然な交流を求めている。また、〈積極的に外へ出て近所の人と話をし、気にかかけあうことが重要である〉、〔ただ集まって、自然に話ができたらいい〕といった、〈自然に集まって馴染みの人と雑談すると寂しくないと思う〉と捉えている。なお、【自然な関係の維持】は【心の張り】と相互に関係しており、心の張りが得られる活動やつながりが満足にあれば、自然な関係も維持できていると言える。

#### 5) 人との交流に関する方略の島

コミュニティの狭小化からネガティブな方面の島は一人暮らし男性高齢者の困りごとと、願望を指している。図解では、これらの困りごとと、願望に対する方略が図解の右側に位置している。

##### (1) 支援を受ける抵抗感

【支援を受けるハードル】の島では《支援を受けるという一線を越えることに抵抗があり、踏み出せない思いがある》という姿が浮かび上がっている。例えば、困りごとが増えたり孤独感を感じると、〔支援を受ける側に入りかけていることを実感する〕ことが増え、〈支援を受ける側になることへの抵抗がある〉と感じている。また、〔買い物に困っているが、迷惑をかけてしまうので気が引けるし、もう長生きしないから支援を断る〕といったように、〈困った時に誰かにお世話になる支援なら遠慮したくなる〉と捉えている。たとえ支援を受ける抵抗が少ない場合でも、〔支援を受けようと思っても面倒臭さが先ばしってしまう〕ことがあり、〈頭では支援を受けたい

と書いていても一歩踏み出せない〉状態になることがある。あるいは、既に支援を受けていても、〔デイサービスでちやほやおだてられて帰ってくるとむなしさを感じる〕ような経験により、〈手厚い接遇は望んでいない〉と感じている。

## (2) 暮らし再建の保留

【支援を受けるハードル】の島は【暮らし再建の保留】の島、すなわち《暮らしを立て直す積極性がわいてこない》と関係し、人との交流を左右する方略である。まず、〔健康でいなくてはいけないが、通院以外の対策は考えていない〕という現状に表れているように、〈健康のために何をすべきかわからない〉場合がある。何をすべきかわかっていたとしても、〔体を動かさなければいけないが一人では天気や体調により簡単に休んでしまう〕ことから、〈一人だと簡単に怠けてしまい後ろめたさを強める〉こともある。さらに、〔体が動かないので、できる仕事もなく時間をもてあましている〕ことから、〈有り余る時間を仕方なく埋める〉という後ろ向きな対策に至っている。

## (3) 過去との折り合いの難しさと人との交流に関する方略における葛藤

【支援を受けるハードル】と【暮らし再建の保留】の島は、【過去との折り合いの難しさ】の島、すなわち《過去と折り合いをつける難しさを抱えて今を生きている》姿と相互に関係している。〔老後のことは考えずに生きてきたつけが今来ており、自業自得に思う〕と認識していたり、〔体調を崩し、仕事ができず劣悪な暮らしをするしか道がなかった〕と過去を振り返っている。このことから、〈自分ではどうしようもなかった過去の道のりが今に続いている〉と捉えている。

【過去との折り合いの難しさ】と、【自然な関係の維持】ができていないコミュニティの有無、【諦めた相互理解】の程度、【自分のコミュニティ狭小化】の深刻度は、一人暮らし男性

高齢者の人との交流を左右する方略である【支援を受けるハードル】の高低と相互に影響しあっている。それぞれの島が複雑に影響しあっているため、人との交流における困りごとを解消するための支援とその抵抗感との間に葛藤が生じ、一筋縄ではいかない事態となっている。

## 考察

### 1. 本研究の対象者像

本研究の対象者は、要支援または要介護認定を受けながらも、大半は介護保険サービスを利用していなかった。また、反対の志を持つ島同士である【つながりの保全】と【諦めた相互理解】に表れているように、人との交流を保てるかどうか分岐点に立っている集団であると考えられる。これらのことから、本研究の対象者の特徴は、A地区にて概ね自立して一人暮らしをしているが、人との交流に制限・不安を抱え始めている男性高齢者であると言える。

### 2. 人との関係性と支援への抵抗感

本研究の結果より、一人暮らし男性高齢者は老化に伴って、【自分のコミュニティ狭小化】からポジティブな方面として【つながりの保全】を求める、つまり、人と資源とのつながりによる安心と自信を求めることが示された。山根ら<sup>18)</sup>は、要支援の一人暮らし男性高齢者がフォーマル・インフォーマルサポートを獲得するプロセスを明らかにし、一人暮らし男性高齢者は、「日常生活上の困難」を感じた後、「周囲の人との交流の減少」、「活動範囲の縮小」、「限られた交流関係の継続」の状態になると述べている。つまり、老化と共に活動範囲と交流範囲が狭くなる中で、人との交流を求めるという点で一致していると考えられる。また、本研究の結果より、人との交流に関して支援を受けるか否かという葛藤に対して、【自然な関係の維持】ができていないコミュニティの有無と【支

援を受けるハードル】が相互に影響しあっていることが示された。山根ら<sup>18)</sup>は、サービスを利用することの決定には「サービス利用に対する抵抗感」と「対等な援助関係を意識」が影響すると述べている。この中で【支援を受けるハードル】は「サービス利用に対する抵抗感」と類似しており、【自然な関係の維持】は「対等な援助関係を意識」と人との関係性という点では類似しているが、【自然な関係の維持】は地域住民同士の関係性を示しており、「対等な援助関係を意識」は支援者との関係性を示している。つまり、支援への抵抗感は支援者との関係性だけでなく、地域住民との日々の付き合いのような自然な関係性によっても左右されることが、本研究に特徴的な知見と考えられる。一人暮らし男性高齢者が利用した経験のない公的な支援のように、馴染みのない関係性である支援を受けることには抵抗するが、地域住民との自然な関係性の中で支えあうことに対しては抵抗が少ないと考えられる。この点を考慮した【自然な関係の維持】を可能にする支援を望むニーズがあると思われる。

### 3. 人と交流する際の方略とニーズ

本研究の結果より、一人暮らし男性高齢者の人との交流に関する方略は、【支援を受けるハードル】の高低と【暮らし再建の保留】に表れている。【自然な関係の維持】をしたり、【自分のコミュニティ狭小化】を食い止め、【つながりの保全】を得たい場合は、【支援を受けるハードル】と【暮らし再建の保留】を、一人暮らし男性高齢者自身または支援者が、どう調整できるかが鍵を握っており、この点に潜在的な支援のニーズがあると考えられる。

先行研究において、一人暮らし高齢者の日常生活動作の不都合に対する対処<sup>19)</sup>や、一人暮らしを継続している要支援・要介護高齢者の日常生活上の困難に対する対処<sup>20) 21)</sup>に関して、道具の使用方法や交通手段、動作方法を試す・工夫する・

変更するといった方略が、明らかになっている。Kroeseら<sup>22)</sup>は、方略を自分自身で調整する能力が低い場合、健康的な行動を「先延ばし」にすると述べている。この「先延ばし」は、ストレスの増加と健康行動の減少と相関していることが明らかになっている<sup>23)</sup>。つまり、「先延ばし」にあたる【暮らし再建の保留】を防ぐためにも、一人暮らし男性高齢者が人と交流する際の方略を調整する必要があると考えられる。また、要支援の一人暮らし女性高齢者を対象とした人との交流に関する先行研究によると、「工夫できる・できないを一人で判断する」という方略が「自分一人のための価値ある毎日を過ごす」という要因と「自分の役割を実感したい」という要因を、促進・抑制する構造となっていた。このことから、方略を意識化させたり、方略に対する助言をする支援の必要性が示されている<sup>16)</sup>。

しかし、本研究においては、人との交流に関する方略の調整を手助けする必要性があることが示唆された。一人暮らし男性高齢者が人と交流する際の方略である【支援を受けるハードル】と【暮らし再建の保留】を調整し、支援に対する抵抗感を弱くしたり、暮らし再建を促進するような調整を手助けすることが、人との交流を深めることにつながると考えられる。抵抗感や保留に対して、支援者が性差を考慮した支援を行う必要性があるという点については、小林ら<sup>24)</sup>による人との交流が乏しい一人暮らし高齢者の支援に関する研究と一致している。

#### 4. 研究の限界

本研究の対象者の一人暮らしのきっかけとその期間や、家族との関係性を統制しなかったため、それらの違いによって人との交流における構造が異なる可能性は否定できない。

## 結論

本研究の目的は、A 地区で一人暮らしをしている男性高齢者における人との交流に関する構造を明らかにし、ニーズを解明することであった。その結果、一人暮らし男性高齢者は、人と【自然な関係の維持】をしたり、【自分のコミュニティ狭小化】を食い止め、【つながりの保全】を得ることが課題と思われた。この課題を解決するために、人との交流に関する方略である【支援を受けるハードル】と【暮らし再建の保留】に、潜在的な支援のニーズがあると考えられる。すなわち、人との交流に関する方略を支援者が意識化させたり助言することに加えて、人との交流に関する方略の調整を手助けする必要があることが示唆された。今後はこのニーズを踏まえ、一人暮らしをしている男性高齢者を対象とした社会参加を促すプログラムを開発する必要がある。

## 文 献

- 1) 内閣府：平成 29 年版高齢社会白書（全体版）． [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1\\_2\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1_2_1.html)（参照 2018-05-03）．
- 2) 齊藤雅茂，冷水 豊，山口麻衣，武居幸子：大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴．社会福祉学 50(1)：110-122，2009．
- 3) 齊藤雅茂：高齢者の社会的孤立と地域福祉—計量的アプローチによる測定・評価・予防策—．明石書店，2018，pp.28-46．
- 4) 大久保豪，斎藤 民，李 賢情，吉江 悟，和久井君江，他：介護予防事業への男性参加に関連する事業要因の予備的検討—介護予防事業事例の検討から—．日本公衛誌 52(12)：1050-1058，2005．
- 5) 竹原 敦，繁田雅弘，山田 孝：地域高齢者の役割変化の

- 性差による特性－役割チェックリストを用いて－. 作業行動研究 20 (1) : 32-38, 2016.
- 6) 板東 彩, 河野あゆみ, 津村智恵子 : 独居虚弱高齢者の身体的機能, 心理社会的機能, 生活行動における性差の比較. 日本地域看護学会誌 11 (1) : 93-99, 2008.
  - 7) 西野由希子, 山田 孝 : 地域生活する男性脳卒中障害高齢者の作業適応と人間関係の変容プロセス. 作業行動研究 15 (3) : 109-118, 2011.
  - 8) Brownson CA (山田 孝・訳) : 地域健康のためのプログラム開発－計画立案, 実施, 評価の戦略－. Scaffa ME・編著 (山田 孝・監訳) : 地域に根ざした作業療法－理論と実践－. 協同医書出版社, 2005, pp.92-110.
  - 9) 田高悦子, 河野あゆみ, 国井由生子, 岡本双美子, 山本則子 : 大都市の一人暮らし男性高齢者の社会的孤立にかかわる課題の質的記述的研究. 日本地域看護学会誌 15 (3) : 4-11, 2013.
  - 10) Allison T, Peter S, Jonathan C: Consolidated criteria for reporting qualitative research (COREQ): A 32-item checklist for interviews and focus groups. Int J Qual Health Care 19(6):349-357, 2007.
  - 11) 猪股英輔, 小林法一 : 要介護高齢者における一人暮らしの工夫－家事に焦点を当てて－. 作業療法 33(3) : 230-240, 2014.
  - 12) 風間順子, 飯田苗恵, 大澤真奈美, 齋藤 基 : 高齢者の閉じこもりに対する家族の認識の構造. 日本看護科学会誌 37 : 65-75, 2017.
  - 13) Kawamura M, Kitaoka K: Framework of subjective cognition in community-dwelling individuals with schizophrenia who experienced long-term hospitalization. Journal of Wellness and Health Care 42(1):29-40, 2018.

- 14) 川喜田二郎：続・発想法－KJ法の展開と応用－. 中央公論新社, 1985, pp.247-269.
- 15) 野村健太, 會田玉美：訪問サービスを利用する一人暮らし男性高齢者が地域社会から孤立を強めるプロセス. 作業療法 35 (5) : 482-492, 2016.
- 16) 野村健太, 猪股英輔, 小林法一：要支援の一人暮らし女性高齢者が人との交流を求める構造に関する質的研究. 日保学誌 22 (3) : 101-109, 2019.
- 17) 霧芯館：KJ法研修のご案内. <http://mushinkan.jp/contents/globalnavi1183454166656.html> (参照 2019-12-21).
- 18) 山根友絵, 百瀬由美子, 松岡広子：要支援一人暮らし男性高齢者のサポート獲得プロセス. 日本看護研究学会雑誌 35 (5) : 1-11, 2012.
- 19) 山本広美, 古川直美, 佐藤弘美, 宮本千津子, 池田由紀, 他：独居老人の日常生活動作の不都合とその対処方法. 川崎市立看護短期大学紀要 5 (1) : 99-105, 2000.
- 20) 清田明美：独居の生活を継続している要介護後期高齢者の日常生活上の困難と対処. 老年看護学 22 (2) : 79-87, 2018.
- 21) 田中昭子, 小西美智子：ひとり暮らし虚弱高齢者の在宅生活継続の対処方法. 老年看護学 8 (2) : 63-72, 2004.
- 22) Kroese FM, de Ridder DTD:Health behaviour procrastination:a novel reasoned route towards self-regulatory failure. Health Psychol Rev 10(3):313-325, 2016.
- 23) Fuschia MS:“I’ll look after my health, later”:A replication and extension of the procrastination-health model with community-dwelling adults. Pers Individ Dif 43(1):15-26, 2007.
- 24) 小林江里香, 藤原佳典, 深谷太郎, 西真理子, 斉藤雅茂,

他：孤立高齢者におけるソーシャルサポートの利用可能性  
と心理的健康—同居者の有無と性別による差異—。日本公  
衛誌 58（6）：446-456，2011.



表1 面接ガイドの項目

- 
- 1 人との交流の頻度や内容, 満足度について
  - 2 自治会やボランティアなどの地域での活動への参加状況と満足度について
  - 3 一人で生活する上での苦勞や楽しみについて
  - 4 上記1~3と地域の慣習との関係について
  - 5 上記1~3と健康状態の変化との関係について
-

表2 対象者の属性

対象者	年齢		一人暮らし		親族との関係		要介護度	ADL	IADL	住環境	面接 時間(分)
	(歳代)	歴(年)	歴(年)	きっかけ	親族との関係	要介護度					
A	80	5	妻と別居	妻と別居	子・兄弟と親近	要支援1	自立	自立	2階建ての戸建て(持家)	120	
B	60	30	離婚	離婚	兄弟と疎遠	要介護1	自立	自立	集合住宅の2階(賃貸)	88	
C	70	3	妻と死別	妻と死別	子・孫と親近	要支援1	自立	自立	2階建ての戸建て(持家)	70	
D	60	12	母と死別	母と死別	従妹と親近	要支援2	自立	調理, 買物介助	平屋の戸建て(持家)	102	
E	90	21	同居人と別居	同居人と別居	兄弟と疎遠	要支援2	自立	自立	2階建ての戸建て(持家)	54	
F	90	3	妻と死別	妻と死別	子・孫と親近 兄弟と疎遠	要支援1	自立	自立	2階建ての戸建て(持家)	86	
G	70	6	妻と別居	妻と別居	子・孫と疎遠	要支援1	自立	買物介助	集合住宅の2階(賃貸)	94	
H	60	20	離婚	離婚	明言せず	要支援2	自立	自立	集合住宅の2階(賃貸)	71	
I	70	43	母と別居	母と別居	兄弟と親近	要支援1	自立	自立	2階建ての戸建て(持家)	100	
J	80	23	離婚	離婚	子・孫と親近	要介護1	自立	自立	2階建ての戸建て(持家)	99	